



じつきょう

地歴・公民科資料 No.70

巻頭

新学習指導要領特集 —地理歴史科編—

前号の特集では公民科の新学習指導要領について取り上げたが、今号は地理歴史科について取り上げることにする。

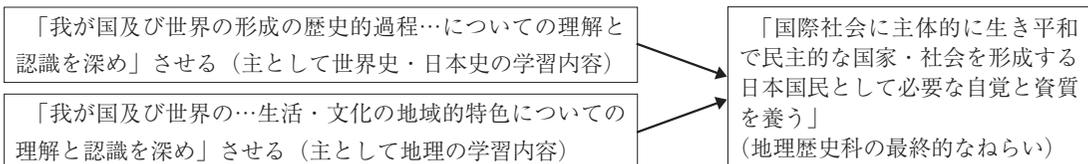
まず、地理歴史科の「科目構成」を示し、地理歴史科の目標についてまとめた。また以下のページでは、地理歴史科の各科目について内容構成の現行と新課程を対比し、その特徴をまとめた。

科目構成

教科	科目	標準 単位数	すべての生徒に 履修させる科目
地 理 歴 史	世界史A	2	○ どちらか1科目 並びに ○ いずれか1科目
	世界史B	4	
	日本史A	2	
	日本史B	4	
	地理A	2	
	地理B	4	

○地理歴史科の目標

地理歴史科の目標は現行と同様に三つの部分から成っており、最終的なねらいを示す文言(現行は「国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う」)が、教育基本法改正を受けて改められている。



各科目の随所において科目相互の関連が強調され、論述や討論など言語活動の充実がはかられている。また、指導要領解説に「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画(抄)が参考資料として掲載されていることからもうかがえるように、公民科同様「持続可能な社会」が強く意識されている。なお、各科目の「内容の取扱い」から「細かな事象や高度な事項・事柄には深入りしないこと」という文言が姿を消した。

◆ も く じ ◆

巻頭	新学習指導要領特集	1
トピックス	日米中の政治経済動向—これからどこに向かうのか— ／中村 政則	12
お知らせ		16

① 世界史 A (標準単位数 2)

1 目標

世界史 A の目標には、次の 3 つの要素がある。①学習内容として、「近現代史を中心とする世界の歴史を」扱うこと。②学習の方法や展開にかかわるねらいとして、年表や地図その他の資料の活用を通じて「地理的条件や日本の歴史（現行学習指導要領〈以下本稿では現行と表記〉では「わが国の歴史」と関連付けながら理解させ）、現代の人類が直面する課題を「歴史的観点から考察」していくこと。③この科目を通して培ったり養ったりする能力として、「歴史的思考力」と「国際社会に主体的に生きる日本国民（現行では「日本人」としての自覚と資質）」をあげている。特に②に関しては、中学校社会科や地理歴史各科目との関連が強調されている。

2 内容

(中括弧と矢印で内容がおおよそ該当する箇所を示し、**新規**は今回の学習指導要領に新たに設けられたものを示す。これらは筆者の判断による。)

現 行	新 課 程
(1) 諸地域世界と交流圏 ア 東アジア世界 イ 南アジア世界 ウ イスラーム世界 エ ヨーロッパ世界 オ ユーラシアの交流圏 (ア) 海域世界の成長とユーラシア (イ) 遊牧社会の膨張とユーラシア (ウ) 地中海海域とユーラシア (エ) 東アジア海域とユーラシア	(1) 世界史へのいざない 新規 ア 自然環境と歴史 イ 日本列島の中の世界の歴史 (2) 世界の一体化と日本 ア ユーラシアの諸文明
(2) 一体化する世界 ア 大航海時代の世界 イ アジアの諸帝国とヨーロッパの主権国家体制 ウ ヨーロッパ・アメリカの諸革命 エ アジア諸国の変貌と日本	イ 結び付く世界と近世の日本 ウ ヨーロッパ・アメリカの工業化と国民形成 エ アジア諸国の変貌と近代の日本
(3) 現代の世界と日本 ア 急変する人類社会 イ 二つの世界戦争と平和 ウ 米ソ冷戦とアジア・アフリカ諸国 エ 地球社会への歩みと日本	(3) 地球社会と日本 ア 急変する人類社会 イ 世界戦争と平和 ウ 三つの世界と日本の動向 エ 地球社会への歩みと課題
オ 地域紛争と国際社会 カ 科学技術と現代文明	オ 持続可能な社会への展望 新規

世界史 A の新学習指導要領の内容で、現行から大きく変化したいくつかの点に注目したい。

(1) まず、「世界史へのいざない」という大項目が設けられ、「ア 自然環境と歴史」と「イ 日本列島の中の世界の歴史」が設定された。「中学校社会科の内容との連続性」を意識したもので、現行・新学習指導要領における世界史 B の「世界史への扉」にあたるものだが、内容はそれぞれ異なる。

●「ア 自然環境と歴史」は、導入に位置づけられたもので、「河川、海洋、草原、オアシス、森林など」の歴史の舞台において、「地図や写真などを読み取る活動」を通して、人類の生活や活動について学習する。そのいくつかの例として、河川、海洋、草原についてあげてみる。

取り扱う自然環境の例	扱い方の例
大河流域の沖積平野に形成された古代文明の自然環境と人類の生活や活動	<ul style="list-style-type: none"> ・大河流域の自然環境と深くかかわることで地域特有の生活・文化が形成されたことに触れさせる。 ・治水や灌漑を行い河川を管理することが文明の在り方に影響を与えたことを考察させたりする。
漁撈や交通、交易の場としての海洋と人類の生活や活動	<ul style="list-style-type: none"> ・漁撈等からなる海洋文化に触れさせる。 ・海洋が経済や文化の交流、情報伝達を促す大動脈としての役割を果たしたことを考察させたりする。
内陸アジア北部に帯状に伸びる大草原の自然環境と人類の生活や活動	<ul style="list-style-type: none"> ・家畜の飼育や狩猟に依存する生活が営まれ、羊・山羊・馬などを利用した遊牧民の機動力に富む社会が形成されたことに触れさせる。 ・農耕地帯との接触により、遊牧民と農耕民の間に交流・対立等の関係が生まれたことを考察させたりする。

●「イ 日本列島の中の世界の歴史」については、「日本列島の中に見られる」「人、もの、技術、文化、宗教、生活など」に着目して、「年表や地図などに表す活動」を通し、世界との関係や交流について考察させるとしている。扱う時期として、できるだけ早く実施するのが望ましいものの、適切な時期の実施で良いとしている。ただし、その際、中学校社会科での学習をさらに発展させ、世界史的視野を持たせることを必要としている。

(2) 「(2) 世界の一体化と日本」は、現行の「(1) 諸地域世界と交流圏」と「(2) 一体化する世界」という二つの大項目で構成されていたものを一つにまとめている。このことは、目標にある「近現代史を中心とする世界の歴史を」扱うのであれば、前近代史を精選することにつながる。それゆえに、各国史の細部に深入りすることなく、一体化する世界を構造的にとらえるよう留意することになる。

しかし、現実的には、単に歴史の流れとか構造だけを扱ったのでは、生徒の理解が得にくかったり、混乱を生じたりすることが多々あり、そのためにまったく前近代を扱わないケースも出ていた。それを回避するためにも、前近代よりも近現代に重きを置きながらも、前近代の内容については網羅的に細部に深入りすることを戒めているのであって、生徒による構造的な理解を得やすくするために扱う材料、博物館及び資料館などの活用をはかる意味ならば、一部「深入りする」ことは可能と考えることもできる。いずれにしても、地球的な視野に立って一体化する世界を構造的にとらえさせるためにも、様々な材料を安易に網羅するのではなく、精選するなどして生徒の理解を得やすいように工夫することが授業者に求められている。

(3) 「(3) 地球社会と日本」に「オ 持続可能な社会への展望」が新設され、「ア 急変する人類社会」から「エ 地球社会への歩みと課題」まで示された事項を参考にして、適切な主題を生徒に設定させ、歴史的観点から様々な資料を活用して探究する活動を行い、世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現について展望させるとしている。その際、世界史学習のまとめた位置づけである意味からも、作業的・体験的な学習を積極的に取り入れて主体的な探究を促し、この成果をまとめたり、発表したりして言語活動の充実をはかることも大切であるとした。その例として、「移民と移住先社会での生活」、「世界戦争と国際社会」、「環境と人類の歴史」についてあげてみる。

着目した点と設定する主題の例	探究する活動の例
「ア 急変する人類社会」において、人々の移動や移民に着目する「移民と移住先社会での生活」	・移住先社会での文化摩擦の問題や、移民が移住先社会の経済や社会に果たした様々な貢献について取り上げ、探究する。
「イ 世界戦争と平和」において、世界戦争の原因や人々の平和への思いに着目する「世界戦争と国際社会」	・世界戦争の原因やその歴史的背景を整理し、諸国家や諸国民が協調し共存できる国際社会の実現について探究する。
「エ 地球社会への歩みと課題」において、地球規模で深刻化する環境問題に着目する「環境と人類の歴史」	・産業革命以後の歴史を概観し、調和のとれた開発と環境の在り方について探究する。

(前神奈川県立柏陽高等学校教諭・教育プランナー 松木 謙一)

② 世界史 B (標準単位数 4)

1 目標

「世界史 B」の目標には、次の3つの要素がある。①学習内容として、「世界の歴史の大きな枠組みと展開を」扱うこと。②学習の展開や方法にかかわるねらいとして、世界史 A 同様に年表や地図その他の資料の活用を通じて「地理的条件や日本の歴史（現行学習指導要領<以下本稿では現行と表記>では「わが国の歴史）」と関連付けながら理解させ」とし、その上で世界の歴史における「文化の多様性・複合性」を諸地域世界の接触と交流に着目して考察したり、「現代世界の特質」を様々な要素の関連の中で考察したりしていくこと。③この科目を通して培ったり養ったりする能力として、世界史 A と同様に「歴史的思考力」と「国際社会に主体的に生きる日本国民（現行では「日本人）」としての自覚と資質」をあげている。

2 内容

(中括弧と矢印で内容がおおよそ該当する箇所を示し、**新規**は今回の学習指導要領に新たに設けられたものを示す。これらは筆者の判断による。)

現 行	新 課 程
(1) 世界史への扉 ア 世界史における時間と空間 イ 日常生活に見る世界史 ウ 世界史と日本史とのつながり	(1) 世界史への扉 ア 自然環境と人類のかかわり 新規 イ 日本の歴史と世界の歴史のつながり ウ 日常生活にみる世界の歴史
(2) 諸地域世界の形成 ア 西アジア・地中海世界 イ 南アジア世界の形成 ウ 東アジア・内陸アジア世界の形成	(2) 諸地域世界の形成 ア 西アジア世界・地中海世界 イ 南アジア世界・東南アジア世界 ウ 東アジア世界・内陸アジア世界 エ 時間軸からみる諸地域世界 新規
(3) 諸地域世界の交流と再編 ア イスラーム世界の形成と拡大 イ ヨーロッパ世界の形成と変動 ウ 内陸アジアの動向と諸地域世界	(3) 諸地域世界の交流と再編 ア イスラーム世界の形成と拡大 イ ヨーロッパ世界の形成と展開 ウ 内陸アジアの動向と諸地域世界 エ 空間軸からみる諸地域世界 新規
(4) 諸地域世界の結合と変容 ア アジア諸地域世界の繁栄と成熟 イ ヨーロッパの拡大と大西洋世界 ウ ヨーロッパ・アメリカの変革と国民形成 エ 世界市場の形成とアジア諸国 オ 帝国主義と世界的変容	(4) 諸地域世界の結合と変容 ア アジア諸地域の繁栄と日本 イ ヨーロッパの拡大と大西洋世界 ウ 産業社会と国民国家の形成 エ 世界市場の形成と日本 オ 資料からよみとく歴史の世界 新規
(5) 地球世界の形成 ア 二つの大戦と世界 イ 米ソ冷戦と第三勢力 ウ 冷戦の終結と地球社会の到来 エ 国際対立と国際協調 オ 科学技術の発達と現代文明 カ これからの世界と日本	(5) 地球世界の到来 ア 帝国主義と社会の変容 イ 二つの世界大戦と大衆社会の出現 ウ 米ソ冷戦と第三世界 エ グローバル化した世界と日本 オ 資料を活用して探究する地球世界の課題 新規

世界史 B の新学習指導要領の内容で、現行から大きく変化したいいくつかの点に注目したい。

(1) まず、大項目「(1) 世界史への扉」で、現行の「ア 世界史における時間と空間」に替え、「ア 自然環境と人類のかかわり」が新設され、これを世界史学習の導入で扱うとした。これは「イ 日本の歴史と世界の歴史のつながり」や「ウ 日常生活にみる世界の歴史」ができるだけ早い時期の実施が望ましいものの、適切な時期で良いとしたのと対照的である。さらに、各中項目から一つないし二つ程度の主題学習を設

定するとしている点もあわせて、現行の「世界史への扉」よりやや手厚く扱っていると考えられることもできる。
 (2) 「(2) 諸地域世界の形成」の最後に「エ 時間軸からみる諸地域世界」, 「(3) 諸地域世界の交流と再編」の最後に「エ 空間軸からみる諸地域世界」, 「(4) 諸地域世界の結合と変容」の最後に「オ 資料からよみとく歴史の世界」が新たに設けられ、時間軸・空間軸・資料の読解などにかかわる主題をそれぞれの重大项目のなかで設定して追究する活動が求められている。

●「時間軸からみる諸地域世界」では、「関連する事項を選び出し、それを年代順に並べたり、因果関係で結び付けたり、地域世界ごとに比較したりする活動を」行う。その例を二つあげてみる。

中項目と設定主題	選び出す事項	追究する活動
「ア 西アジア世界・地中海世界」における「ローマ帝国とキリスト教」	帝政ローマの政治・経済の推移とキリスト教の成立・展開に関連する事項	ローマ帝国の動向とキリスト教の発展の関係を年代を追いながら整理し、その内容を年表や模式図にまとめさせる。
「イ 南アジア世界・東南アジア世界」における「仏教の広まりと仏教に関連する遺跡」	南アジアにおける仏教の成立から普及・変容の過程に関する事項	それらを年代順に並べて年表を作成させるとともに、各時代に造営された仏教に関連する建造物を地図に示し対比させる。

●「空間軸からみる諸地域世界」では、「同時代性に着目して主題を設定し、諸地域世界の接触や交流などを地図上に表したり、世紀ごとに比較したりするなどの活動を」行う。その例を二つあげてみる。

中項目と設定主題	地図上にあらわす内容	考察や説明する活動
「ア イスラーム世界の形成と拡大」における「イスラーム世界の拡大」	その領域を民族・宗派ごとに地図化する。	それらを世紀ごとに比較化し、イスラーム世界の中心勢力の変遷を考察させたり、作成した地図を活用して説明させたりする。
「イ ヨーロッパ世界の形成と展開」における「中世ヨーロッパの交易活動と黒死病の流行」	各都市の黒死病の流行年と、人・ものなどの移動ルートを地図上に記入させる。	そのことを、作成した地図を活用して説明させたりする。

●「資料からよみとく歴史の世界」では、「その時代の資料を選択して、資料の内容をまとめたり、その意図やねらいを推測したり、資料への疑問を提起したりするなどの活動を」行う。その例を二つあげてみる。

中項目と設定主題	資料のよみとく内容	考察の活動
「ア アジア諸地域世界の繁栄と日本」における「鄭和の遠征とアジア交易圏」	鄭和の遠征に関する航海誌などを取り上げてその内容をよみとくさせる。	インド洋や東南アジア海域の様子やアジア交易圏に関する当時の中国人の認識を考察させる。
「イ ヨーロッパの拡大と大西洋世界」における「ルネサンスとは何か」	ルネサンス期の聖母子像を取り上げて中世の聖母子像と比較しながらその特色をよみとくさせる。	ルネサンスの意味や背景について考察させる。

(3) 「(5) 地球世界の到来」が19世紀後期から扱うようになったことから、現行の「(4) 諸地域世界の結合と変容」の「オ 帝国主義と世界の変容」が「ア 帝国主義と社会の変容」としてこの重大项目に設定された。また、「オ 資料を活用して探究する地球世界の課題」で主題を設けて、全時代の学習を通して習得した知識や技能を活用して、「これからの世界と日本の在り方」や世界史にとっても重要な視点となった「世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現」について展望させるとしている。

(前神奈川県立柏陽高等学校教諭・教育プランナー 松木 謙一)

③ 日本史 A (標準単位数 2)

1 目標

今回の学習指導要領の改訂は、先年行われた全国学習状況調査の結果に基づく中央教育審議会の答申を受け、「基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得に努めるとともに、思考力・判断力・表現力等を確実にはぐくむため言語活動の充実を図り、社会参画に関する学習を重視する」(文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』, P3, 2008年)という視点の延長線上に沿って行われた。その結果、「日本史 A」の科目としての目標では、現行の「近現代史を中心とする我が国の歴史の展開」が、「我が国の近現代の歴史の展開」に変更され、さらに従来の「世界の歴史と関連付け」に加えて、「諸資料に基づき」、「地理的条件」、「現代の諸課題に着目して」という新たな文言が追加された。これは日本史 A の科目の特徴である近現代全体の学習を一層重視することによって言語活動の充実や学習内容の確かな定着化を図り、歴史を学習する上で必要とされる基礎的・基本的な知識・技能の習得を向上させて歴史的なものの見方や考え方を養い、さらに諸資料を活用して幅広い視野に立ち主体的に歴史を考察し表現する学習内容の充実を期することを年間指導計画の中に位置付けたものとなっている。

2 内容

(中括弧と矢印で内容がおおよそ該当する箇所を示し、**新規**は今回の学習指導要領に新たに設けられたものを示す。これらは筆者の判断による。)

現 行	新 課 程
(1) 歴史と生活 ア 衣食住の変化 イ 交通・通信の変化 ウ 現代に残る風習と民間信仰 エ 産業技術の発達と生活 オ 地域社会の変化	(1) 私たちの時代と歴史 ※現行(1)のア～オに相当
(2) 近代日本の形成と 19 世紀の世界 ア 国際環境の変化と幕藩体制の動揺 イ 明治維新と近代国家の形成 ウ 国際関係の推移と近代産業の成立	(2) 近代の日本と世界 ア 近代国家の形成と国際関係の推移 イ 近代産業の発展と両大戦をめぐる国際情勢 ウ 近代の追究 新規 ※アは現行(2)のア・イ及びウの一部と現行(3)のアの一部をまとめたもの。またイは現行ウの一部と現行(3)のアの一部及びイ・ウをまとめたもの
(3) 近代日本の歩みと国際関係 ア 政党政治の展開と大衆文化の形成 イ 近代産業の発展と国民生活 ウ 両大戦をめぐる国際情勢と日本	(3) 現代の日本と世界 ア 現代日本の政治と国際社会 イ 経済の発展と国民生活の変化 ウ 現代からの探究 新規 ※ア・イは現行(4)のア～ウに相当
(4) 第二次世界大戦後の日本と世界 ア 戦後政治の動向と国際社会 イ 経済の発展と国民生活 ウ 現代の日本と世界	

(1) 私たちの時代と歴史

新設のこの大項目は、日本史 A の導入部分として位置付けられ、近現代社会の歴史的事象と現在の自分との結び付きを考察する学習活動を通して、歴史への興味関心と課題意識を深化するとともに、歴史を学ぶ意義を発見することを狙いとして設けられた。またここでは、近代・現代などの時代区分の持つ意味付けや近現代の諸資料を活用して歴史を考察し表現する学習についても配慮するものとしている。その結果、現行

内容の「(1) 歴史と生活」における「身近な生活文化や地域社会の変化などにかかわる主題を設定し追究する学習」は、「現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されたものであるという観点から、近現代の歴史事象と現在との結び付きを考える活動」に変更され、その結果、現行内容の「(1) 歴史と生活」の中項目ア～オの全てが削除されることになった。

(2) 近代の日本と世界

この大項目の特色は、従来二つの大項目に分けられていた近代が一つの大項目として一本化され、近代全体の展開を大観的に捉えるようにしたことにある。その際、中項目アでは近代の政治的動向に重点を置き、同じく中項目イでは経済的動向を重視した配置になっている。つまり、現行内容の大項目「(2) 近代日本の形成と 19 世紀の世界」の中項目ア・中項目イ及び中項目ウの一部と現行内容の大項目「(3) 近代日本の歩みと国際関係」の中項目アの一部がまとめられて新課程の中項目ア（政治的視点重視）となり、現行内容の(2)の中項目ウの一部と(3)の中項目アの一部及び中項目イ・中項目ウがまとめられて新課程の中項目「イ 近代産業の発展と両大戦をめぐる国際情勢」（経済的視点重視）に再構成されている。これに対して、中項目「ウ 近代の追究」は全くの新設であり、ここでは近代の政治や経済、それを取り巻く国際環境などと国民生活や文化の動向といったものが相互に深く関連しているという観点を重視し、適切な課題・主題を設定して追究し表現する活動を通して、歴史的な見方や考え方を育むことを主眼としている。

(3) 現代の日本と世界

(2)と同様に、中項目「ア 現代日本の政治と国際社会」は主として政治的な視点に立脚した考察を重視しており、また中項目「イ 経済の発展と国民生活の変化」は主として経済的な視点に立脚した考察を重視している。それ故、ア・イは現行(4)の中項目ア～ウに相当している。しかしこれに対して中項目「ウ 現代からの探究」は全くの新設で、日本史 A の最終まとめの部分として位置付けられ、(1)・(2)を発展的に継承することによって現代社会の形成者としての自覚を促す方向性を示している。

大項目(1)の導入部分では生徒による歴史への興味関心・課題意識を高めたり、歴史を学ぶことの意味付けなどを狙いとし、続いて大項目(2)では近代の政治・経済・国際関係などと国民生活や文化が密接に関連しながら展開していることを学習することによって、生徒自身が身の回りの社会的事象と関連させた適切な主題を設定して追究し表現することを狙いとしている。そして最終まとめの大項目(3)では「現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されてきたものであるという観点から」という表記に見られるように、近現代の歴史と現在、更には現在の自分との深い関わり合いに着目させることによって、自分にとって歴史的課題が一体何なのか、またそれを解決するためには諸資料を拠り所にしてどのように考え、自らを表現していったら良いのかという歴史の主体者の立場に立脚した姿勢が強く求められている。

3 内容の取扱い

先ず内容の全体については、「(1) ア 我が国の近現代の歴史の展開について国際環境や新たに地理的条件などと関連付け、世界の中の日本という視点に立って考察させること」を念頭に置くとしている。この際、1の目標に即して基礎的・基本的な事項・事柄を精選して指導内容を構成することとしている。新設項目としては、「(1) ウ 年表、地図その他の資料を一層活用させるとともに、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを積極的に取り入れるよう工夫すること」、「(1) エ 国民生活や文化の動向が地域社会の様子と密接に関連しているという観点を重視し、衣食住や風習・信仰などの生活文化についても扱うようにすること」と記している。次に「(2) この科目の指導に当たっては、客観的かつ公正な資料を基に史実を正確に理解するように導くとともに、多面的・多角的に考察し公正に判断する能力を育成する」としている。最後に内容の取扱いでは、内容(1)を導入として位置付け、(2)・(3)のア・イで近代、現代の時代区分の持つ意味やその考察に有効な諸資料の扱いを学び、(2)・(3)のそれぞれのウで資料を活用して歴史を考察したりその結果を主体的に表現したりする技能を高めることを意図している。特に(3)のウは、この科目の最終まとめとして位置付けている。

(神奈川県立公文書館 川島 敏郎)

④ 日本史 B (標準単位数 4)

1 目標

今回の学習指導要領の改訂は、「日本史 A」の箇所ので記述したのと同じ趣旨に沿って行われた。「日本史 B」の科目としての目標では、「日本史 A」のそれと一部複合させる形で、現行の「世界史的視野に立って」が、「諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて」に変更された。これは言語活動の充実や学習内容の確かな定着化を図り、歴史を学習する上で必要とされる基礎的・基本的な知識・技能を通史的な学習活動を通じて習得・向上させ、歴史的なものの見方や考え方を身に付けさせるように配慮するとともに、諸資料を活用して幅広い視野に立脚して歴史を考察し表現する学習を年間指導計画の中に位置付けたものとなっている。

2 内容

(中括弧と矢印で内容がおおよそ該当する箇所を示し、**新規**は今回の学習指導要領に新たに設けられたものを示す。これらは筆者の判断による。)

現 行	新 課 程
(1) 歴史の考察 ア 歴史と資料 イ 歴史の追究 ウ 地域社会の歴史と文化	(1) 原始・古代の日本と東アジア ア 歴史と資料 イ 日本文化の黎明と古代国家の形成 ウ 古代国家の推移と社会の変化
(2) 原始・古代の社会・文化と東アジア ア 日本文化の黎明 イ 古代国家の形成と東アジア ウ 古代国家の推移と社会の変化	(2) 中世の日本と東アジア ア 歴史の解釈 新規 イ 中世国家の形成 ウ 中世社会の展開
(3) 中世の社会・文化と東アジア ア 武家政権の成立 イ 武家政権の展開と社会の変化	(3) 近世の日本と世界 ア 歴史の説明 新規 イ 近世国家の形成 ウ 産業経済の発展と幕藩体制の変容
(4) 近世の社会・文化と国際関係 ア 織豊政権と幕藩体制の形成 イ 産業経済の発展と都市や村落の文化 ウ 国際環境の変化と幕藩体制の動揺	(4) 近代日本の形成と世界 ア 明治維新と立憲体制の成立 イ 国際関係の推移と立憲国家の展開 ウ 近代産業の発展と近代文化
(5) 近代日本の形成とアジア ア 明治維新と立憲体制の成立 イ 国際関係の推移と立憲国家の展開 ウ 近代産業の発展と近代文化	(5) 両世界大戦期の日本と世界 ア 政党政治の発展と大衆社会の形成 イ 第一次世界大戦と日本の経済・社会 ウ 第二次世界大戦と日本
(6) 両世界大戦期の日本と世界 ア 第一次世界大戦と日本の経済 イ 政党政治の発展と大衆文化の形成 ウ 第二次世界大戦と日本	(6) 現代の日本と世界 ア 現代日本の政治と国際社会 イ 経済の発展と国民生活の変化 ウ 歴史の論述 新規
(7) 第二次世界大戦後の日本と世界 ア 戦後政治の動向と国際社会 イ 経済の発展と国民生活 ウ 現代の日本と世界	

3 改訂の主なポイント

①歴史を考察し表現する学習の重視

現行の大項目「(1) 歴史の考察」の中項目としての「ア 歴史と資料」は新課程(1)の中項目「ア 歴史と

資料」としてそのまま留保されたものの、中項目「イ 歴史の追究」・中項目「ウ 地域社会の歴史と文化」は削除された。しかし、それに替わるものとして、新課程の大項目「(2) 中世の日本と東アジア」の中項目としての「ア 歴史の解釈」、大項目「(3) 近世の日本と世界」の中項目としての「ア 歴史の説明」、大項目「(6) 現代の日本と世界」の中項目としての「ウ 歴史の論述」という新たな項目が設定されることになった。この一連の4段階方式による歴史学習は、諸資料を活用して歴史を考察し表現する学習活動を、通史的な学習内容と関連付けることによって、歴史学習に関わる基礎的・基本的な知識・技能の習得を高めさせるとともに、それを踏まえて歴史的なものの見方・考え方を養い、さらに生徒自身が課題を設定して探究したものをまとめ上げて論述するようになることを最終目標としている。換言すれば、先ずこの科目の導入としての「歴史と資料」で、様々な歴史資料の存在や歴史が資料に基づいて叙述されていることを理解させるとともに、そこから様々な文化財の歴史的価値や保護の大切さを学び、これを受けて「歴史の解釈」では諸資料を活用することによって歴史的事象の推移や変化、相互の因果関係を紐解き、それぞれの歴史的事象の歴史上の位置付けや意味・意義を解釈させる。さらに「歴史の説明」ではそれぞれの歴史的事象を巡っては複数の見解が成立することに気付かせるとともに、その論拠を理論的に説明できるような能力を身に付けさせる。そして最後に「日本史B」のまとめとしての「歴史の論述」では、これまで積み上げて来た学習活動を基に、生徒自身が課題を設定し諸資料を活用して探究してきた結果を主体的に表現できるようになることを求めている。ここに至っては、「日本史A」と同様に、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の成果が問われることになる。

②近現代の学習の重視と項目の再構成

現行7つの大項目を6つの大項目に圧縮し、「日本史A」同様に、近現代の学習をより重視する項目立てとした。その結果、近世以前の歴史の展開を大観的に捉えることができるようにするために、現行の大項目「(2) 原始・古代の社会・文化と東アジア」の中項目「ア 日本文化の黎明」と中項目「イ 古代国家の形成と東アジア」が一本化され、新課程の大項目「(1) 原始・古代の日本と東アジア」の中項目「イ 日本文化の黎明と古代国家の形成」となり、中項目「ウ 古代国家の推移と社会の変化」との2本立てとなった。また、現行の大項目「(4) 近世の社会・文化と国際関係」の中項目「イ 産業経済の発展と都市や村落の文化」と中項目「ウ 国際環境の変化と幕藩体制の動揺」が一本化されて、新課程の大項目「(3) 近世の日本と世界」の中項目「ウ 産業経済の発展と幕藩体制の変容」となり、中項目「イ 近世国家の形成」の2本立てとして再構成された。この原始・古代と近世における2つの中項目の圧縮により、近現代の中項目への比重が一層高まったと言えよう。ただここで注意しなければならないことは、近現代の学習が重視されるからといって、指導者側としてはそれを学ぶ事象の増大・拡大や詳細化に繋げるのではなく、様々な要素が複雑に絡まりあって成立する近現代社会の動向をより具体的に解き明かしたり、物事を考えさせたり表現させたりする部分を多くする工夫が重要となってくるであろう。

③歴史の総合的な考察の重視

今回の「日本史B」改訂の特色の一つは、各時代の学習の主要目的として、「国家と社会や文化の特色について、国際環境と関連付けて考察させる」ことを、各大項目の共通の文言として明示したことにある。この狙いは、生徒自身が共通の認識・視点に立って各時代の特色を相互対比的に捉えることにより、「日本史B」の科目的特徴である各時代の特色（空間軸）や時代の推移（時間軸）を通史的・大観的に考察し、自らの言葉で表現することができるようになることを重視したものである。

4 内容の取扱い

「日本史A」で既述した内容とかなり多くの部分が重複するので、そちらを参照されたい。それ以外の新設項目としては、「地域社会の歴史と文化について扱うようにするとともに、祖先が地域社会の向上と文化の創造や発展に努力したことを具体的に理解させ、それらを尊重する態度を育てるようにすること」としている。さらに新設された「歴史と資料」「歴史の解釈」「歴史の説明」「歴史の論述」では、「歴史と資料」を科目の導入とし、「歴史の論述」を科目のまとめとして位置付けることが示されている。

(神奈川県立公文書館 川島 敏郎)

⑤ 地理 A (標準単位数 2)

1 目標

現行では「内容の取扱い」に示されている「歴史的背景」という文言が目標に加わった。世界史・日本史各科目の目標に「地理的条件」が加わったことと対をなすものであり、中学校社会科や地理歴史各科目との相互の関連が強調されている。また「日常生活との関連」という文言が加わり、地誌学習を重視する「地理 B」との差別化が図られている。

2 内容

現 行	新 課 程
(1) 現代世界の特色と地理的技能 ア 球面上の世界と地域構成 イ 結び付く現代世界 ウ 多様性を増す人間行動と現代世界 エ 身近な地域の国際化の進展 (2) 地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題 ア 世界の生活・文化の地理的考察 (ア) 諸地域の生活・文化と環境 (イ) 近隣諸国の生活・文化と日本 イ 地球的課題の地理的考察 (ア) 諸地域から見た地球的課題 (イ) 近隣諸国や日本が取り組む地球的課題と国際協力	(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察 ア 地球儀や地図からとらえる現代世界 イ 世界の生活・文化の多様性 ウ 地球的課題の地理的考察 (2) 生活圏の諸課題の地理的考察 ア 日常生活と結び付いた地図 イ 自然環境と防災 ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査

現行の内容が「(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察」に整理統合され、新たな大項目として「(2) 生活圏の諸課題の地理的考察」が設けられた。現行の中項目「多様性を増す人間行動と現代世界」に相当する内容は姿を消した。「内容の取扱い」においては、「二つ又は三つの国（あるいは、課題）を選び」などの選択指定がなくなった。また、GISなどの活用とともに、中教審が答申した具体的改善事項を踏まえ、地図帳の十分な活用が求められている。

(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察

現代世界の地理的認識の深化とともに、地理的技能や地理的な見方・考え方の習得が目指されている。

「ア 地球儀や地図からとらえる現代世界」は、現行の中項目「球面上の世界と地域構成」「結び付く現代世界」を引き継ぐものである。「内容の取扱い」において、「地図の投影法には深入りしないこと」という文言が姿を消した一方、国家間の結び付きをとらえさせるための方法論については、「世界の国家群、貿易、交通・通信、観光の現状と動向に関する諸事情を様々な主題図などを基に」とさらに具体化されている。

「イ 世界の生活・文化の多様性」は、現行の中項目「世界の生活・文化の地理的考察」に対応しているが、地理的な見方・考え方の習得よりも生活・文化の多様性への理解を重視する方向へとシフトした。

「ウ 地球的課題の地理的考察」は、現行の同名の中項目が移行したものだが、世界史と同様「持続可能な社会の実現」という命題が新たに明記された。

なお、近隣諸国と日本に特化した項目は新課程には見られない。しかし、「内容の取扱い」では、科目全体を通して各項目の内容に応じて日本を取り上げ日本と比較し関連付けることが求められている。

(2) 生活圏の諸課題の地理的考察

生活圏の諸課題についての考察による、地理的技能や地理的な見方・考え方の習得が目指されている。

「ア 日常生活と結び付いた地図」では、「身の回りにある様々な地図の収集」「地形図の読図」「目的や用途に適した地図の作成」といった作業的、体験的学習が例示されている。

「イ 自然環境と防災」は現行の中学校社会科でも取り上げられているが、高等学校における中項目化は大きな変化といえる。「内容の取扱い」では、日本における自然災害への対応を具体例を通して取り扱うこと、地形図・ハザードマップ読図などの地理的技能の習得や防災意識向上への工夫が求められている。

「ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査」は、地域調査の実施という点では現行の「身近な地域の国際化の進展」を引き継ぐものといえるが、「世界と結び付く諸事象」「国際化の進展」「日本と世界との結び付き」といった制約はなくなっている。

(フリー教材編集者・ライター 平川 敬介)

⑥ 地理 B (標準単位数 4)

1 目標

現行では「内容の取扱い」に示されている文言「歴史的背景を踏まえて」が、目標に明記された。世界史・日本史各科目の目標に「地理的条件」が加わったことと対をなすものであり、中学校社会科や地理歴史各科目との相互の関連が強調されている。

2 内容

現 行	新 課 程
(1) 現代世界の系統地理的考察 ア 自然環境 イ 資源, 産業 ウ 都市・村落, 生活文化	(1) 様々な地図と地理的技能 ア 地理情報と地図 イ 地図の活用と地域調査
(2) 現代世界の地誌的考察 ア 市町村規模の地域 イ 国家規模の地域 ウ 州・大陸規模の地域	(2) 現代世界の系統地理的考察 ア 自然環境 イ 資源, 産業 ウ 人口, 都市・村落 エ 生活文化, 民族・宗教
(3) 現代世界の諸課題の地理的考察 ア 地図化してとらえる現代世界の諸課題 イ 地域区分してとらえる現代世界の諸課題 ウ 国家間の結び付きの現状と課題 エ 近隣諸国研究 オ 環境, エネルギー問題の地域性 カ 人口, 食料問題の地域性 キ 居住, 都市問題の地域性 ク 民族, 領土問題の地域性	(3) 現代世界の地誌的考察 ア 現代世界の地域区分 イ 現代世界の諸地域 ウ 現代世界と日本

現行の大項目「現代世界の諸課題の地理的考察」が解体されて「(2) 現代世界の系統地理的考察」「(3) 現代世界の地誌的考察」に組み込まれる一方、大項目「(1) 様々な地図と地理的技能」が設けられた。「内容の取扱い」においては、「二つ又は三つの事例（あるいは地域，課題）を選び」などの選択指定がなくなった。また、GISなどの活用とともに、中教審が答申した具体的改善事項を踏まえ、地図帳の十分な活用が求められている。

(1) 様々な地図と地理的技能

事実上、旧課程（平成元年告示）の中項目であった「球面上の世界と地図」「地理情報と地図」「地域の調査と研究」の復活といえる。ただし、当時「内容の取扱い」で示された「高度な図法には深入りしないこと」に相当する文言は見られない。

(2) 現代世界の系統地理的考察

大項目の名称は現行と同じだが、地理的技能の習得を重視する傾向は薄れ、地理的事象の系統地理的考察とともに、現代世界の諸課題についての地球的視野からの理解が目指されている。系統地理的考察の対象として「人口」「民族・宗教」が新たに中項目レベルで明示されたが、これは現行の大項目「現代世界の諸課題の地理的考察」から中項目「人口，食料の問題の地域性」「民族，領土問題の地域性」を吸収したものといえる。

(3) 現代世界の地誌的考察

大項目の名称は現行と同じだが、対象地域のスケールの指定（「市町村規模」「国家規模」「州・大陸規模」）がなくなり、日本を重点的に扱う中項目が加わった。旧課程の大項目「世界と日本」に近づいたともいえる。「ア 現代世界の地域区分」で地域区分の方法の理解などをはかった上で、「イ 現代世界の諸地域」で諸地域の地域的特色や地球的課題の理解、地誌的考察の方法の習得をはかるという流れである。イでは「歴史的背景を踏まえて」考察させることが明記されている。

地誌的考察の方法としては、「多様な事象を項目ごとに整理して考察する」「特色ある事象と他の事象を有機的に関連付けて考察する」の二点に加えて、「対照的又は類似的な性格の二つの地域を比較して考察する」方法が「内容の取扱い」において新たに示された。

「ウ 現代世界と日本」では、科目全体のまとめとして、日本が抱える地理的な課題の解決の方向性や将来の国土の在り方などについて展望させることとなった。（フリー教材編集者・ライター 平川 敬介）